

## 民具（養蚕に使った道具）

大野城市教育委員会



大野城市役所の敷地内に1本の桑の木が立っています。これは昭和35年までこの地にあった福岡県蚕業試験場の記念樹です。

明治期以降、絹は日本の輸出高第1位を占める貴重な資源でした。外貨獲得のために政府が養蚕を奨励し、日本のほとんどの農家が蚕を育て、繭を取っていました。大野城市（当時は大野村）も例外ではなく、現在の市役所の場所へ福岡県蚕業試験場と繭検定所の誘致をしました。その際、道路を整備しました。

上の写真は桑テボくわという桑の葉を採取する時に使う民具です。桑の葉を食糧としている蚕は、成長すると共にその食欲が増大し、一日に何度も餌を与えなければなりません。その際に活躍するのが桑テボです。蚕が小さい頃には枝の先のほうの柔らかい葉を与え、成長と共に硬く大きな



葉を与えるようになります。さらに大きくなると枝ごと採取してきて、そのまま与えるということもしました。そのような状況に対応できるように、桑テボにも大きさがいろいろとありました。

◀桑テボを使用している様子と桑の葉を入れた様子

蚕は通常は蚕座さんざとよばれる飼育場で育てられます。蚕座には蚕箱かまぼこや竹バラなどが用いられました。蚕がたくさんいる場合、壁に作った棚に蚕箱を上から下までびっしりと並べます。給桑きゅうそうといって新しい桑の葉を与える時には蚕箱を一旦取り出し、給桑台に載せて餌を与えます。この時、一緒にしりがえという作業を行います。しりがえとは蚕の糞などを取り除く作業で、その際に、食べ残した桑の葉も一緒に掃除します。こうしていつも蚕座を清潔に保っていなければ、蚕が病気になるて死んでしまいます。健康な蚕を育てていい繭を取る事が農家にとって必要なことでした。



蚕は桑の葉に含まれる香りの成分に反応することがわかっています。新しい葉を入れるとすぐにそれまで食べていた古い葉から新しい葉へと移ります。蚕が桑の葉を食む音を「木の葉に雨が注ぐようだ」と表現した歌もあります。実際、耳を澄まして聞き入ると、ワシャワシャといったような音がします。何万頭の蚕がいっせいに桑の葉を食むのですから、それはすごい音になったことでしょう。また、その歌では養蚕の忙しさを「髪も結ばず夜さへ寝ねず、心つくして一月あまり」と歌っています。蚕を育てるということがどれ程大変だったかわかります。実際農家では農業をしながらの養蚕だったので、なおさらだったでしょう。

絹が貴重な資源だったということは前に述べましたが、それを作る蚕も大変重宝されました。それで、蚕は牛馬と同じように「頭」を用いて数えられました。

▲①給桑直後の様子。②蚕が桑の葉を食べている様子。③1時間もしないうちに桑の葉が食べられている様子。④葉脈と茎だけ残っている様子。